

発見された陶棺

― 加市古墳群(沢田) ―

「陶棺」とは、土で作られた素焼きの棺桶のことです。美作の古墳時代に

における特徴的な遺物の一つで、古墳時代後期、6世紀後半から7世紀前半頃に盛んに用いられています。

美作では「土師質亀甲型陶棺」とよばれる、野焼きで表面が亀の甲羅

のような網状の突起が巡らされ、蓋

には縄掛け突起、底には複数の筒状の脚がつくものが一般的です。重量

があるため、大きなものは身と蓋を4分割にして組み合わせて用いていました。

香南地区、下沢田集落背後の丘陵

中腹にある加市古墳群の陶棺の発見・調査の経緯については明治34・

35年(1901・1902)の『考古界』という専門誌に掲載されました。その内容によると次のようでした。

陶棺は、明治25・26年(1892・1893)年に発生した第一・第二

水害の災害復旧工事のため、古墳の石室の石材を抜き取る作業中に発見

されたといわれています。

陶棺はその後埋め戻されましたが、考古学者の和田千吉氏が調査のため同地を訪れた際に陶棺が一部露出しているのを発見し、地元の光井清三郎氏と中島幹氏に依頼して調査が行われました。

調査の結果、2基の古墳のうち上の古墳(加市二号墳)からは2個の陶棺が発見されましたが、それ以外の出土遺物はなかったとされています。石室の規模等は不明ですが、径8mの円墳でした。

下の古墳(加市一号墳)は大型陶棺3個、小型陶棺1個があり、周囲には須恵器31、勾玉2、銀環2、金環4、ガラス玉14、陶棺の中から直刀の破片が見つかったといわれています。古墳は破壊されていましたが、石室が約2mの長さで残っていたようです。

光井氏らは、これらの陶棺が再び埋め戻されたまま消滅してしまうことを惜しみ、地元の人々の協力を得

て東京帝国大学(現東京大学)に寄贈することにしました。そして再び掘り出した際に壊れず完全な形のものが1個あり、中島氏がこれを撮影しています(写真1)。

この陶棺には蓋の接ぎ合わせ目に木の葉を押しつけた痕があり、大変珍しいと記録されています。

その後、陶棺が見つかった場所には地元の人々によって「往古貴顕之墓碑」と刻まれた記念碑が建てられました。碑文には、陶棺の発見・調査の経緯と、陶棺に埋葬された被葬者の慰霊のために建てられたことが



写真1 陶棺(中島氏が調査時に撮影したもの)



写真2 陶棺発見の記念碑(明治40年建立)

刻まれています。

加市古墳群の出土遺物は、東京帝室博物館(現東京国立博物館)が所蔵する小型陶棺・四耳壺・蓋と、前述の東京大学所蔵のもの以外は残念ながら所在不明となっています。これらのうち四耳壺は平安時代(9世紀)の陶器であることから、後の時代に骨壺として古墳に追葬されたものと思われる。

当時のこの発見は、地元での話題でおさまらず、専門誌によって全国の研究者に紹介されたという点で、非常に意義のある出来事であったことは言うまでもありません。

お問い合わせ先

生涯学習課 田下
電話(0868)54-7733

参考:「陶棺の埋没について」。

【美作国古田郡澤田村の陶棺】『考古界』より

【鏡野町史】考古資料編

【鏡野町の石造物】